

歌の濃さ 佐佐木定綱

歌にはある程度の濃さが必要らしい。

連作の作歌方法について、テーマありきの作歌を試していた。テーマを先に設定して、それにそった題材やことばを持つてくる。これはやりすぎるとよくないようだ。自分の中からアイデアを汲んでくるので、数を作っていくと歌が薄くなっていく。しばしばテーマに引きずられて、関連した意味のあることばはかすくつてこれなくなる。「間延びした言葉は観念の水割り」と丸谷才一は言った。うまい酒はロックで飲みたいものでしよう。

つきすぎとか、飛躍しすぎとかいう批評があり、それに照らし合わせれば、関連した意味のあることばでいいじゃないかと思うかもしれないが、そうでもない。意味のみの歌は、解剖した蛙の神経を刺激して、この足が動きまますというようなもので、それのみでは生きている蛙のことはできない。

養老孟司が「現代人は感覚を通して世界を受け入れることをしない。(中略)目や耳から入れるものは情報だけである。その情報とはなにか。意味を持つていることである。」(『Kotoba』No.28 集英社)と言っている。

たとえば木を見たとき。〃ここは境内で、しめ縄が巻かれているので〃神木だ〃針葉樹で、杉だ〃木漏れ日がきらめいている〃あとと側面に立てられたびび割れ看板に仰々しく書かれた〃樹

齡千年。平安時代から生きている〃などを知ることになる。すべて意味を持つている。

それに対するアンチテーゼとしてファールブルがある。(ファールブルの特集号なのでファールブルが出てくる)

ファールブルは「自然をありのままに観察する。」ありのままとは自然の矛盾をも内包した、混沌や複雑さとも言える。

前述の木のたとえでいえば、〃根のところろにどんぶりが落ちていく〃とか、〃かすかにラーメンの匂いがする〃とか。現実の大半は意味不明である。意味のあるものしか見ていないから、世界をわかったような気持ちになっている。

・やがて発光するかと思うまで夕べ追いつめられて白猫膨る(『黄金分割』永田和宏)

追いつめられて威嚇をしている白猫が夕陽に照らされると、発光するほどに膨る。白猫が発光することに意味があるのか。意味などない。

・夕焼けがさつき終わって濃い青に染まるドラッグストアや神社(『日本の中でたのしく暮らす』永井祐)

夕焼けが終わると世界は青く染まるのだ。薄暗やみや月明かりではない、濃い青。ありのままの自然の変化がある。

情報として手に入れたイメージは簡素化、純化されたものである。はなから濾過されたものをさらに濾過しても、薄く味気ないものになってしまう。無意味や矛盾、複雑さを含んだものを一度自らの中で濾したり熟成させたりすることで、初めて濃いものが生み出せるのである。